

アルコールと

② 絵画 (第3回)

芸術

「オールオーヴァな人生」ジャクソン・ポロック

高橋 龍太郎 *Ryutaro Takahashi*

医療法人社団こころの会タカハシクリニック 院長

ステイーブン・ナイフェとグレゴリー・ホワイト・ミス著『Jackson Pollock: An American Saga』を原作とした映画『ポロック 2人だけのアトリエ』の冒頭、生涯のパートナーとなったリー・クラズナーとの出会いが描かれている。1941年、マクミラン画廊での出品を期に交際を始めたのだが、リーは「あなたとは5年前に出会っている。ロフトでのダンスパーティーでへべれけに酔っていて、私の足を踏んづけて倒れた私の上におおいかぶさったのよ（フォーリンオールオーヴァーミー）」と自己紹介する。

のちのオールオーヴァ絵画への導入と1936年当時アルコール中毒状態だったことを表す洒落た導入になっている。オールオーヴァな目一杯の生き方、キャンバス一杯の絵画。“オールオーヴァ”こそポロックの生涯を貫いた言葉とっていいだろう。

なだいなだは、その著書『アルコール中毒 社会的人間としての病気』のなかで、アルコール中毒を分類し単純性習慣性のアル中アルコールットの次に、アルコールとノイローゼの2つの言葉を縮めたアルコローズを挙げている。そして、このアルコローズをさらに分類し、気の小さい引っ込み思案の長男タイプを挙げ、次にひとりっ子や末っ子に多いタイプを挙げている。甘えん坊で、自己中心的で身勝手なところがあり、それでいて淋しがり屋が多い。自分のもっている2、3の長所にはうぬぼれるほどの自信をもつ。このタイプの人間は母親に対して強い甘えの気持ちをもっている。要するに、成熟した人格をもたない未熟な人間というタイプである。しかし、彼らはしばしば芸術的能力を示すことがある。

これはまるでポロック自身をモデルにしたような記述

である。5人兄弟の末っ子に生まれ、気丈な母親の導きによって芸術への道を歩んだポロックは、後に《H・Mの肖像》として描かれたヘレン・マロット（守衛のアルバイトをしていた中学校の老人教師）と親しくし、その後パートナーとなったリー・クラズナーに強く依存して生き続ける。女性問題で彼女に見離されるように別居したとき、泥酔状態で運転をして不慮の死を迎えることになる。

未熟で反抗的な人格の上に1927年の高校入学時から飲酒癖が始まっており、アルコール中毒の治療に至るのに時間はかからなかった。1937年（25歳）には最初の治療を受けている。その後も入院を繰り返し、ユング派の精神分析を受けるなど治療には何度も取り組んだが断酒を続けることはできず、最期に酒によって命を落とすことになった。

それでもかなりの作品を残すことができたのは、アルコール中毒でもいわゆる連続飲酒型ではなく酒乱型だったため、創作は続けられたことも大きい。それでも死ぬ1年半程前には絵筆が取れなかった。

ポロックは、1948年～1950年にかけて代表作であるオールオーヴァのボード絵画を作製する。そしてこの時期は、イースト・ハンプトンのエドウィン・ヘラー医師からアルコール中毒の治療を受け、断酒ができていた時期と重なる。

“オールオーヴァ”とは“ドリッピング”や“ポアリング”といった技法で画面全体を均質的に処理する絵画を指し、“全面を覆う”という言葉のように中心から周縁にかけて均質的で上下左右の序列が排除されて“地”と“図”の区別がなくなっている構造になっている。ポロックの絵画を表現して使われ、次第に抽象表